他の方々に任せます

shake

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

麻帆良学園図書館島の地下にはダンジョンが在る。

それは転生者が神に願い、神が悪乗りして作り上げた永遠に続く迷宮であり、踏破した者に富と栄光を齎す聖杯である。

しかしダンジョンの設置を望んだ当人的にはかなり不満な出来栄えであったらしく、神に対して散々毒吐いた後に、その場へ至るのに必要な鍵を捨ててしまった。鍵は暫く放置されていたが、神かダンジョンか、将又鍵自身が望んだのか。やがてとある少年の手に渡る事になった。

目次

page0 序章 ―― 1
page1 邂逅 ―― 7

page0　序章

人の知恵では計り知れぬ事が、世には溢れている。
そんな言葉を否定する様に動いてきた自分ではあるが、と男は椅子に腰掛ける。
椅子に〝普通に座る〟と云うのも久し振りだ。椅子の上に蹲るのが男の常態(スタイル)で、椅子をこの様に使うのは二度目だった。それは、常と違う動作、考え方をしなければならないと云う事であり、今迄の遣り方ではこの事件群を統括して考えられないと云う証左だ。
先ず何が起きたか？
両の蟀谷(こめかみ)を人差し指で揉み解しながら考える。
最初に起きたのは交通事故である。これは間違いが無い。
埼玉県議貝谷千里の秘書である名嘉山義勝の運転する車の前輪左タイヤがパンク。スピンし、歩道を歩いていた幹本直人を轢き重傷を負わせた。
それだけならば、政治家が関わっただけの交通事故として、一週間後には忘れ去られただろう。
しかし幹本は数年前に強盗殺人事件の被疑者として捜査線上に浮かんだものの、証拠不十分で立件が不可能だった男。そして名嘉山の指紋はとある強姦事件の現場に残された物と一致した。更には事務所の公金横領が発覚し、貝谷自身も収賄と少女買春容疑で逮捕された。
〝以上〟がこの事件群の発端である。
その後貝谷の息子が覚醒剤所持で現行犯逮捕、売人が逮捕され、所属する暴力団が家宅捜索され、保険金詐欺と殺人事件と銃刀法違反が発覚し、癒着していた刑事が捕縛され、証拠捏造に因る冤罪が暴かれ

一月(ひとつき)の間に一万人近くの逮捕者と百人以上の負傷者が出た。
明らかな異常事態である。有り得ない事だ。しかし実際に起きている。
一つ一つの事象に不審な点は無い。刑事全員が職務に忠実であり、

摘発すべき犯罪を全て白日の下に晒しただけだ。内部告発が集中したのもこう云う流れに乗るべきだと云う、日本人らしい判断だと納得出来る。

だが罪の割に短い刑期で出所した者や心神耗弱状態であったとして刑罰を逃れた者、情況証拠は黒だが物的証拠が無く起訴に至れなかった者、国を売り捏造報道を行う身中の虫達が、事故に遭い家を焼き出され、強盗に刺されて入院しているのは偶然か？偶然で片付けて良いのか？

偶然な訳が無い。恐らく彼等は現時点で罪に問う事が出来ない者、物的証拠を残していない者だ。明らかに狙われている。

――誰が？誰が狙っている？

そいつらは人の心を操り衆目の中で階段から人を突き落として見咎められず、ベテラン消防員の目を欺いて家屋を焼き払う事が出来る、完全無欠の犯罪者集団だ。きっとケネディやマイケルを殺したのもそいつらで、スターリンやヒトラーを唆したのもそいつらだ。

――落ち着け。未だ焦る様な状況じゃあない。相手を過大評価するな。常に冷静であれ。

多分、そんな言葉を思い出す時点で冷静ではない。けれど、まともな答えなど有る筈も無い。誰かが何かをしている事は確実だけれど、如何にそれを行っているかを考えれば超自然的な存在を肯定せざるを得ない。

――否。待て。

ここは一旦全てを棚の上に放り投げよう。

超自然的な存在を肯定してみよう。

複数か単数かは不明であるが、その存在は一応基本的には人間の、この国の法律に抵触しない様に動いている。警察組織を手助けし、証拠が隠滅されているか、既に下された判決が不当である人間のみが事故に見せ掛け打ち倒されている。つまりその組織乃至人物は、彼もしくは彼女等なりの倫理観に基づいた活動を行っている様だ。

警察組織やこの国の国民はこの怪異を歓迎しているし、勧善懲悪などと持て囃すメディアも有る。男自身、快哉を叫びたい気持ちが全く

無いと言えば嘘になる。しかしそれは、これを行っているのが人間であればの話だ。上から蟻の行列を弄るかの様に自分達の生活を気儘に動かす存在など、認められる訳が無い。我々は神の玩具ではないのだ。

ならばこそ、この事件群を起こした張本人と対峙し、止めさせなければならない。立件は不可能だろう。暗殺も無理だと思われる。説得するしか無い。神ならば神らしく、見守るだけにせよと。

「……何を馬鹿な事を」

思わず独り言が漏れる。

彼(か)の存在は、この国では既に神格化されているらしい。泰山府君、平成の坂本龍馬、暴れん坊将軍、月光仮面などと様々に呼ばれているが、何故か最も支持されている名前がエジプト九柱神のアヌビス神である。次点がコエンマである辺り、他国人に『あいつら未来に生きてんぜ』と言われても仕方無かろう。

兎も角アヌビスは老害を一掃し、癌細胞を駆逐し、罪人を裁き正道を照らす。景気は上向きになり自殺者も減っている。政治家官僚は役に立たないと吐き捨てるだけの時代は終わった。塵芥は捨てられ正しきを行える時が来たのだ。〝正しい事〟は人の心を明るくする。行動的にする。最早アヌビスが手を貸しているのか警察組織がその実力を十二分に発揮しているのか分からない状況だ。

つまり、この最初の事件が肝要なのだと言える。

何故あの事件が〝最初〟であったのか。他の事件の様に同時多発的に起こしていたのならば、〝起点〟は不明なままであっただろう。

恐らく、連中が『アヌビスにとって特別な事件』の関係者だったのだ。

貝谷千里、名嘉山義勝、幹本直人。この三人が関係する事件の被害者の内、容疑者は誰か。ノートパソコンを引き寄せ操作する。

収賄・少女買春。贈賄した専務も春を鬻いだ者も、自らの判断で行い誰かに強制された訳ではなさそうだ。常習犯であり力を持てば暴走する類の人間である。容疑者から外しても良かろう。

強姦事件の被害者。これは恨みも深いと思われる。一年前に交通

事故で死んでいるが、だからこそ容疑者足り得る。名を南空奈緒美と云う。●●●●●

強盗殺人事件。これは犯人が幼い子供の目の前で両親祖父母を殺害している。幼かったが故に彼の証言は採用されなかったが、容疑者は幹本であった。当然最有力容疑者ではあるが、彼は現在九歳。そんな子供に復讐相手を殺さないなどと云う自制が可能なのか。その判断は実際に会ってみなければ分かるまい。因幡来兎――現夜神来兎は犯人足り得るか。そしてそんな境遇の子供を誰が説得出来ると言うのか。

――まぁ、私にこの事件を〝解決〟しろ、と云う依頼が来た訳じゃあないんですけどね。

やれやれと首を振って、男は常の姿勢に戻る。矢張りこちらの方が落ち着く。椅子は腰掛けるのではなく蹲るべき物なのだ。

と。

まるでタイミングを見計らうかの様に携帯電話の着信音が響いた。発信者は見るまでもない。自分の携帯番号を知っている者などワタリしか居ないのだから。

『あ～今お時間は宜しいですか、エル？』

「……貴方は誰です？何故この番号を？」

渋みの有る老人の声を想像していたのに、聞こえたのは全く違う、若い男の声であった。ディスプレイを見れば非通知となっている。

『そう！望めば君の番号でさえ手に入る……そう云う位置（ランク）に居る人間だと思ってくれれば良い』

エルと呼ばれた男は目を閉じた。迷宮入りを含む３５００もの事件を解決し、各国警察から難事件解決を依頼される事が多々有る探偵エル（L）・ローライト（Lawliet）。それが彼である。彼へ依頼するには、国際刑事警察機構（ICPO）の定例議会に出席するワタリと云うエージェントを通す必要が有る。それを通さず接触を図ると云う事は……。

『ＩＣＰＯから話を通すのは剰りに不自然なのでね……恐らく君も興味は持っているでしょう？日本の、あの馬鹿げた現象を起こしている人間が誰なのかを掴んでもらいたい』

日本の現状を歓迎していない、日本国内外の犯罪者組織か。
「……理由を伺っても？」
『私が日本に放っていた部下との連絡が途絶えました。新たに送り込んだ二十名も即日、ね。調べた処、別組織も、日本国外から派遣されたエージェントは軒並み連絡を絶っている様ですね』
「ほう……記録上、あの現象に因る死者は出ていない筈でしたがね」
『その通り！部下達は、死んではいない。生きていますが操られている。そう云う状態の様です。表の仕事は普段通りに熟していた……』
成る程犯罪者同士で潰し合いをさせる存在である。人を洗脳するくらいは簡単、と云う訳か。そして犯罪者相手には容赦が無い。
「正体を掴んで――貴方はどうするつもりですか？」
『――私の仕事を邪魔したんです。人が相手ならば死んでもらうのが筋ですが……怪物が相手ではね。出来れば引き込みたい処ですが、それも難しいでしょう』
「でしょうね」
目的が本当に殺害ならば断るつもりだが、そうではないだろう。出来ない事は分かり切っている。
『ですからこれは好奇心です。あの国では今何が起こっているのか？それを知りたい』
「成る程。そう云う事でしたら受けましょう」
『ＧＯＯＤ！報酬は、前金として十五万ドルを振り込みましょう。それと成功報酬で三十五万。貴方ならば洗脳される事は無いと思いますが……まぁ念の為、連絡方法はこちらから指示します』
「破格ですね」
報酬は大体五万から二十万ドルである。前金だけで十五万ドルは破格であった。
『死なずとも人格を塗り替えられる危険が有ります。五十万ならば妥当でしょう』
今迄の事件では死の危険が有る物も多かったが、それは敢えて言わずにおいた。くれると言うならもらっておこう。
『では連絡方法ですが――』

それから十分程会話をし、その通話は途切れた。

page1　邂逅

人は外見で判断出来ない。そんな事は分かり切っている。
しかしそれでも一目見ただけで理解出来る事も有る。
夜神来兎は見た目通りの年齢ではない。断じて只の小学生ではない。
『心せよ。お前が深淵を覗き込む時は、深淵もまたお前を見ているのだ』
深淵？否だ。そんな生易しいモノではない。アレは人の目ではない。そして自分から覗き込んだ訳でもない。
虚無よりも尚深き闇。全てを破壊し尽くす獣性。それを難無く従える知性。法と混沌が交じり合った鳶色の瞳。それに見詰められた。品定めされたのだ。
過去、様々な犯罪者と接見してきた。快楽の為に人を殺す者。自分が上に行く為に邪魔だったからと殺した者。じゃれただけのつもりで殺した愚者。追い詰められて牙を向いた小心者。他者の生命など歯牙にも掛けぬ者。心が壊れた者。そんな連中にも恐怖を感じた事は無かった。
だがアレは。あの目は。
恐怖だけではない。畏れも感じた。敬いも。慈愛も。
五体倒地して爪先に接吻するべきかとも悩んだ。
アレは。否、夜神来兎は人ではない。神だ。現人神だ。荒神(あらがみ)だ。
獣なら。狩人なら。化物ならば人にも斃せる。だが神は。神は人には斃せない。否応も無く理解出来る。
夜神来兎はこの世界を変える気だ。この世界に住む人間の意識を変える気だ。
当たり前の様に正義を行える世界に。悪を憎める世界に。必要悪を必要としない世界に。
剰りに清い流れには、魚は棲まぬと人は云う。ならば棲める魚を作るだけだと彼の瞳は語った。

最早誰にも彼を止められぬ。人の身で止める事は能わぬ。
彼を止められるのは神だけだ。
「――貴女では……彼を止められませんか？」
「これは可笑しな事を云う。私は寧ろアイツを応援する側だ。否、信奉する側と言った方が正しいかな」
彼女が盤に置いた黒石が淡く光る。一応他に秘するべき事柄である為、エルがイタリア語、相手はドイツ語で話していた。
「成る程」
現在エルは、竜崎大河と云う偽名で麻帆良第六小学校の教師をしている。この学校も、他所と変わらず阿呆な教師はどんどん免職されているので補充要員として潜り込むのは容易かった。が、人手不足である為逆に辞めるのは難しそうである。部活の顧問も中学校のものを二つ兼務だ。
その一つである囲碁部。学園都市である麻帆良には部活動が数多在るが、囲碁部将棋部チェス部は小学生から大学院生までが合同となっている。目の前の少女は麻帆良学園女子中等部二年のエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルと云う。迚も中学生には見えず、精々小学校高学年と云った容姿だが、彼女も見た目通りの年齢ではないだろう。彼は神だが彼女は怪物と云ったクラスか。それでも人には届かぬ位階である。
「もし、彼が暴走した場合……」
「それは無いな」
石を一つ置いて最悪の仮定を述べるが、冒頭で彼女に否定された。
「それは何故ですか？」
「来兎は私に『もし自分が危険だと感じたら始末を付けて欲しい』と爆弾の起爆スイッチを渡している。自分の心臓に埋め込んだ爆弾のな。その覚悟が有るんだ。憎悪に駆られて世界を滅ぼす様な真似はせんさ」
「止められないのではなく止める気が無い、と云う事ですか」
「そう云う事だ。もし奴が堕ちると云うならば、私も共に堕ちる」
「……まぁ、彼に貴女の様な相手が居るなら確かに心配は無いのかも

知れませんね」
　実際の年齢差が幾つなのかは知らないが、お似合いのカップルと言えよう。見た目も美少年と美少女だし。
「しかし、一人の人間によって支配される世界と云うのは……矢張り私は嫌ですよ」
　自由意志を持つ人間であるならば。世界征服などと云った暴挙には全力で抵抗するべきである。
　それはエルの譲れぬ意識であり、夜神来兎への宣戦布告だった。
　が。
「？……ああ。安心しろ。この恩恵を受けられるのは、この国だけだ。世界征服など考えていない」
　と鼻で笑われた。
　そう言われれば、この現象は各国に飛び火している訳ではない。日本国内だけに留まっている。
「――今後他国に広げていく事は無いと？」
「考えてもみろ。悪人をただ鏖殺するだけなら兎も角、罪を正しく裁いて刑務所に入れ、更正させて社会復帰させると云うプログラムを真面目に、十全に機能させようと云うのだ。更には悪法を廃し現法を改良し、冤罪を無くして迅速且つ精確な捜査を徹底させると。滅茶苦茶面倒だろう？」
「まぁ、それは」
　しかし彼程の位置に居る者ならば、
「ああ分かっている。出来ないって事は無いんだ。ただ、面倒だ。分かるだろう？この国の患部は切除し癒やす。自分が住んでいるからな。だが他所の面倒までは見てやる義理は無い。そう云う事だ」
「ああ」
　神は神でも日本限定の神、と云う事か。世界全体を掌握しようとは考えていないと。
「まぁアイツは『この国の改革だって成功するかどうかも分からないのに、他所の国民の命までは背負えない』と言っていたが、本音は、この国を仮想敵国にしている連中なんざ知った事か、だろうな」

「そっちの理由の方が納得出来ますね」
実に分かり易い。●●●あれらは如何贔屓目に見ても負債だ。殲滅すると云う手段が無いなら無視する他有るまい。
エヴァンジェリンにパシらされていた神が帰って来たのはそんな折である。
「ただいま戻りました。はい。エヴァさん、先生。お望みの品です」
「おお。ありがとう、来兎。矢張り脳味噌が疲れた時には糖分だな」
「『疲れた脳に刺激的甘味！ロイヤルハニー・ミルクセーキドリンク２０００』……『熱量：２０００ｋｃｌ』!?」
高が２００ｍｌの飲料にそんな高カロリーをぶち込めるものなのか。製造販売元を見れば、麻帆良飲料と書かれている。地元企業だろうか。
エルとしては甘いものと頼んだだけなのだが、想像以上の糖分が得られそうで若干引き気味である。
と言うか。
「くくく。糖分と来兎分が揃った今、私に勝てる確率はコンマ２％以下だと思うが良い」
「ちょ、エヴァさん!?止めて！先生見てるから止めて!!」
エヴァンジェリンが夜神来兎を捕獲（ハグ）していた。猛禽類に捕らえられた兎は耳まで真っ赤である。恐らくこの飲み物よりもダダ甘であろう桃色空間の所為で砂糖を吐きそうだ。これを飲んだら相乗効果で歯が溶ける。
「……不純異性交遊は、私の見ていない所でお願いします」
「分かった。来兎、私の家に行こうか」
「ええっ!?……あ、そうだ！僕、エヴァさんの勝つ処が見たいな～っ」
「残念ですが夜神君。貴方が暴れた所為で盤面が崩れました。お流れですね。と言うか私の負けです」
本来負けず嫌いのエルではあるが、ほぼ初心者の囲碁で、更に目の前であの状態を維持されたまま勝負を続けて勝てるとは思えない。大人しく勝ちを譲る事にした。
「うむ。私の勝ちだな！行くぞ、来兎」

「え、ちょ、ま、せめて下ろして下さいっ」
少女に俵担ぎにされて運ばれる少年を、ハンカチを振って見送る。
「……二人って、いつもあんな感じですか？」
「ええ、まぁ……」
「大人しくしてるのは二人で打ち合ってる時だけです」
他の部員に訊けば、肯定の言葉が返ってきた。ならば彼女の言う様に、心配する必要は無いだろう。
しかし依頼者に如何報告すべきか。それが一番の問題だと思われる。